



ルポ

森のようちえん

SDGs時代の子育てスタイル

おおたとしまさ

集英社新書ノンフィクション

はじめに

ざっくりいうならば、「森のようちえん」とは、自然のなかで子どもたちを自由に遊ばせるスタイルの幼児教育・保育のムーブメントです。この場合の自然には、里山、川、海、都市公園なども含まれます。自主保育で森のようちえんしている、子育てサークルもあれば、認可幼稚園や保育園が森のようちえんすることもあります。

これをしなくちゃ森のようちえんじゃないとか、こんなことをしているようでは森のようちえんとは呼べないとか、そんな狭い定義はなく、細かいところでは違いもあるけど、大きな意味で目指すところは似てるよねというひとたちがなんとなくつながって、森のようちえんの文化を、日本の子育て環境の中に、ゆるく育んでいます。それこそ何十年もかけて森を育てるようにゆっくりと、しかし確実に、そのムーブメントが広がっているのです。

日本独自の^{じみ}滋味あふれる教育スタイルとして、いずれはモンテッソーリ教育やシユタイ

ナー教育、イエナプラン教育などと並び称されるポテンシャルを秘めていると私はいらんでいます。SDGs (Sustainable Development Goals : 国連が定める持続可能な開発目標) の文脈にもぴったりですし。

森のようちえんの魅力と課題を明らかにしていくのが本書の役割ですが、取り急ぎわかりやすいメリットを一つだけ挙げるとすれば、いま話題の「非認知能力」がぐんぐん育つということ。 「生きる力」の土台といわれる「自己肯定感」も含まれます。「身体感覚」が研ぎ澄まされる効果もあるでしょう。

それだけじゃありません。もしかしたら、森のようちえんで日本の教育の常識が変わるかもしれないと私は思っています。教育のみならず、日本の社会構造までもが変わる可能性があります。「ゆとり教育」にも「大学入試改革」にもできなかったことが、森のようちえんならできちゃう気がするのです。

なぜなら、「右向け右！」みたいに覚えようとする号令ではなくて、ゆるいムーブメントだから。だって、「右向け右！」って言われたら私なんてむしろ左を向きたくなっちゃいますけど、隣で誰かがにこにこ右を見ていたら、「えっ？」って自分もつい右を見ちゃうじゃないですか。感染するみたいに。

感染すれば、仮に森のようちえんに子どもを通わせなくても、自分自身のなかに森のようちえんの視点が芽生えます。その視点で子どもを見れば、自分自身で森のようちえんできるようになります。近くに大自然がなくても大丈夫！それも本書の効能の一つです。

本書執筆のために9つの森のようちえんの一日に密着しました。その他の園の運営者や保護者にも話を聞きました。あつちを見たりこつちを覗いたりしながら、おさんぽするよ
うな気分で森のようちえんをご案内できればと思います。

目次

第一章 「おもちゃ」なんていらぬ

ヨーロッパの「森の幼稚園」との違い

大人の顔色なんて気にしない

保護者のこだわりを形にしていた

たんぼと畑で育てる里山のような

自然の力を借りなきや間に合わない

外来種としての西洋文化

森のようちえんに日本の原風景があった

第二章

「おとな」は見てるだけ!?

モンテッソーリやシュタイナーとの共通点

早期英才教育に舵を切った園を飛び出した

静かな空間づくりはシュタイナー教育に似ている

子どもたちを孤独な勝者にしないために

「行事型」の森のようちえんの存在意義

プロの保育者は子どもはどこを見ているのか？

保護者同士の衝突も「自主保育」の魅力のうち

森のようちえんにプロの保育者は必要か？

第三章

「せいちよう」を焦らない

非認知能力を引き出す自然のマジック

幼児教育が受験競争に巻き込まれた

第四章

森のようちえんは昔、絶海の孤島だった

見えないものが見えてくる非認知能力

幼児教育の本質とは何か？

森のようちえん付属小学校も誕生

「きょうしつ」って何？

森を揺るがす幼児教育・保育無償化制度

どしゃぶりだつてかまわない

森のようちえん旋風を起こした伝説の園

道なきところに自分の道を見つける力

ヨーロッパの森の幼稚園との共通点

無償化制度が森のようちえんの逆風に!?

子どもに園を選ばせることは可能か？

森のようちえんも千差万別

第五章 「しぜん」は子どもの中に

都市部でもできる森のようちえん

あえて都市部で開園する意味は何か？

森のようちえん初心者あるある

月2回の導入で保育の質が変化した

内なる自然と外なる自然の共鳴を求めて

人間の意図が介在しないことで得られるもの

おわりに

付録 「非認知能力」とは何か？

206

参考図書

219

写真撮影／おおたとしまさ
扉・図表デザイン／MOTHER

※法的に定められた「幼稚園」に限定しないために、一般的に「森のようちえん」の表記が使用されています。本書もそれにならって、法律上の区分にかかわらず、幼児教育・保育を行う組織や団体を「ようちえん」と表記します。「ようちえん」を指す代名詞として「園」と表記することもあります。また、幼児期の「教育」は自ずから「保護」の要素を含んだ「保護教育」だと解釈されるのが教育界の共通理解です。幼稚園教育要領でも「保育」という言葉が使われています。本書でも「教育」「保育」の両方を使用します。

取材にご協力いただいた「森のようちえん」一覧（本書初出順）

「森のようちえん」の最大の魅力は子どもたちの表情や躍動感にほかならないのですが、いかんせん私の筆力では表現しきれません。早々にお手上げしますので、代わりに下記QRコードから各園のサイトに掲載された写真や動画をお楽しみください。

野外保育まめのめ

活動地域：東京都日野市

形態：通年型、認可外保育施設

http://www.manazashi2009.org/mamenome_new.html



森の風こども園

活動地域：三重県三重郡菟野町

形態：通年型、認定こども園

<http://morinokaze-youchien.com/>



花の森こども園

活動地域：埼玉県秩父市

形態：通年型、認定こども園

<https://www.hananomori.org>



ぎふ☆森のようちえん

活動地域：岐阜県岐阜市

形態：行事型、市民活動ボランティア団体

<https://ameblo.jp/wald-kindergarten/>



せた♪森のようちえん

活動地域：滋賀県大津市、栗東市

形態：通年型、幼稚園類似施設

<https://www.facebook.com/setamori.shiga/>



森のだんごむし

活動地域：岐阜県美濃市

形態：通年型、自主保育

<http://dangomushi.boo.jp/>



自然育児 森のわらべ多治見園

活動地域：岐阜県多治見市

形態：通年型、認可外保育施設

<http://www.morinowarabe.org>



野あそび保育みっけ

活動地域：長野県飯田市

形態：通年型、認定こども園

<https://noasobihoiku.wixsite.com/mikke>



ながら幼稚園

活動地域：岐阜県岐阜市

形態：融合型、認可幼稚園

<http://www.nagara.ed.jp>



智頭町森のようちえん まるとんぼう

活動地域：鳥取県八頭郡智頭町

形態：通年型、認可外保育施設

<http://marutanbou.org>



めーぷる保育園

活動地域：神奈川県横浜市

形態：通年型、認可保育所

<https://www.maplecoco.com>



※認可外保育施設であっても都道府県の認証園になっている場合があります。

また本書掲載の情報は取材時のものです。詳しくはそれぞれのウェブサイトなどをご確認ください。

第一章 「おもちゃ」なんていらない

ヨーロッパの「森の幼稚園」との違い



大人の顔色なんて気にしない

髪の毛はざらざらでほさほさ、ほっぺは赤くてかさかさ、そしてDNAレベルで環境に適応してしまったかのような深い褐色の肌をした子どもたちが、築約150年の古民家の庭で泥遊びをしたりおままごとをしたりしています。着ている服もつぎはぎだらけで、しかもうつすら泥色に染まってくすんでいます。

身なりだけを見たら、報道番組で見る海外のストリートチルドレンのようです。でもよく見ると、くすんだ服はどれも、パタゴニア、モンベル、ノースフェイスなど、一流アウトドアブランドのものばかりです。

そして何より、目が違う。自信に満ちた視線で「オマエ、だれ？」ってな感じで私の目を刺して、不敵に微笑ほほえみます。みんな3〜5歳児なのに人間としての迫力があって、大人の顔をうかがう気なんてさらさらない。

男の子が虫かごからカナヘビ（トカゲの仲間）を取り出して私に見せてくれました。か

わいがっつてはいるようなんですが、扱いは手荒くて、足がもげちゃうんじゃないかと心配になります。

「ようこそ、いらっしやいました！」

明るく声をかけてくれたのは、「野外保育まめのめ」（以下、まめのめ）代表の中川ひろみさん。ひろみさんの声には、普通に話していても笑い声のような響きがあります。

10時くらいに古民家の門を出て、その日の活動フィールドまで約1キロ歩きます。子どもたちはそれぞれに、弁当と水筒と着替えの入ったリュックを背負っています。

この日のフィールドは東京都日野市を流れる浅川の川原。数キロおきに鉄道用の橋がかかっているような普通の川原です。ちよつと先には八王子駅前の高層ビルが見えます。特にワイルドってわけでもありません。

土手の上を歩きながら、犬のうんこを見つけては大騒ぎして、そのついでに近くにあったタンポポの綿毛を飛ばし、ノビル（ネギの仲間）を引き抜いてかじり、子どもたちは思いのペースで歩きます。前後数百メートルに広がる二十数人の子どもの群れを、数人のスタッフで視野に収めながらの大移動です。

大きな流木や倒木が転がっていると到着しました。数日前に子どもたちが遊んだ

形跡があります。リュックを置くと、子どもたちは好き勝手に遊び始めます。掘った穴にアリを入れて動物園に見立てる子もいれば、流木の切れ端を光線銃に見立てて戦隊ものヒーローになりきっている子どもたちもいます。川に入って魚や水生昆虫を探す子もいます。夏なら川で泳ぎます。

ひろみさんとスタッフのたもつさんはガスコンロをもってきて、ノビルしか入っていないお好み焼きを焼いています。ほかのスタッフも、子どもたちに誘われれば遊びの相手をすることはありますが、「あれしまししょう!」「次はこれしまししょう!」と指示を出すことはいっさいありません。棒を振り回そうが、木に登ろうが、少々の言い争いがあるうが、目の届く範囲での放牧です。

大きな木の根元では、女の子たちがお店屋さんごっこをしています。何かの順番をめくっていきかいが始まりました。一人の女の子がものすごく怒っています。怒った子が近くの子を叩たたきます。その瞬間に空気が変わりました。まわりの女の子が一斉に叩いた子を責めます。叩いた子がわーーーーーんと泣きます。すると叩かれた子もわーーーーーんと泣き出します。なかなかの修羅場です。

遠目に見ていたたもつさんがしょうがないなあという感じで輪に加わります。いいとも

悪いとも言わず、事情を聞きます。10分くらい経ったでしょうか。そうこうしているうちにいつの間にかわだかまりは溶けてなくなり、泣いていた子たちをまわりの子が慰めておしまいです。

11時半くらいに、なんとなくみんながビニールシートを敷き始めました。お弁当の時間です。手の込んだお料理がまったわっぱのお弁当箱の子もいれば、ラップに包まれたサンドイッチの子もいれば、おにぎりだけの子もいます。

ひろみさんがノビルののお好み焼きを配ります。大阪名物のネギ焼きのようで、一般的には子どもが喜ぶような味ではないと思うのですが、子どもたちは喜んでパクつきます。ちよつと前には、ノビルとヨモギとキクイモを天ぷらにしてみんなで食べたそうです。

お弁当を食べ終わった子からまた遊び再開です。

「あっ、あの雲、『ら』みたいに見える！」と誰かが言うのと、近くにいた子が「あっちの雲は『き』みたいだよ」「あっちは『お』みたい！」と続きます。「あっ、ほんとだ！」とか言い合ってますけど、本当に「ら」とか「き」とか「お」とか読めてるのかはわかりません。でもそうやって文字に興味をもつのでしょ。

オオアラセイトウというほんのり甘い野花をむしゃむしゃ食べながら、肩寄せ合って土



お昼寝の時間ではなく寝たふり遊び



夏には水着持参でもっと豪快に遊ぶ

手に腰かけ、語り合っているカップル（？）もいます。なんだかいい感じで、まわりのお友達も邪魔しません。

子どもたちの遊びの頃合いを見計らって、ひろみさんが木陰に鎮座^{ちんざ}し、絵本を開きます。するとだいたいの子どもたちが自然に集まってきて、お話に聞き入ります。何冊か読み終わったらそれぞれのリュックを背負って古民家に戻りました。

保護者のこだわりを形にしていた

フィールドから戻ったあと、何人かの子どもたちは庭で炊きたての白いご飯にふりかけをかけてもりもり食べていました。おやつです。幼稚園として利用している子については15時に保護者が迎えに来ますが、保育園的に利用している家庭の子はこのあとまだまだ遊びます。ここを卒業した小学生たちも放課後に集まって、学童代わりとしてすごします。以下、ひろみさんの語りです。

活動フィールドは毎日転々としています。ずっといると独占しているみたいに見えちゃうし、フィールドによってぜんぜん表情も違うので。

今日は歩いて行きましたけど、園バスでちょっと遠くに行くこともあります。明日は園バスでタケノコ掘りに行く予定です。季節によって、サクランボが採れるからあそこ行こうとか、桑の実が採れるからあそこにしようとか。でも食育とかはあんまり考えてなくて、スタッフがくいしんぼうなだけです。

ほかの森のようちえんではもしかすると、もっと自然の循環とか美しさとかを教えているのかもしれませんが。でも私にいわせると、子どもの遊びと自然環境保護はぜんぜんぴったりこないのです。子どもは根こそぎとるし、殺すしね。

だから、自然保護とかを熱心にやっているひととフィールドで出会うと怒られちゃうこともあります。「ここは怒るひとがいるから行くのやめとこう」とか言って、もうそこには近寄りません。

自由と勝手は違うんだけど、子どもがやりたいことをいっばいやらせてあげたい。思いが受け取ってもらえて、自由にできたって感覚がいまは何より大事ですから。

まめのめの子どもたちもプラスチックゴミはよく拾いますよ。それは自然環境に良くないからというよりも、ゴミの中で遊んでも楽しくないからです。自然環境のことを教えたりだとか、花の名前を教えたりだとか、そういうのはうちではやらないですね。

そもそも森のようちえんをやるうと思つて始めたわけではありません。余計なものを削つて遊びが残つて、たまたま施設がなかったから外だったというだけですからね。

あとから森のようちえんというのがあると知つて、「あれ、もしかしてうちでやつてることと似てない？」つてなつて、一応「森のようちえん全国ネットワーク連盟」に加入したんです。だからいまでも「私たちは森のようちえんなのかい？ 森のようちえんなのかもしれないし、ちよつと違うかもしれない」という感じですよ。

私自身は子どもが生まれるまで普通の保育園の保育士として働いていて、自分の子育てが一段落してから子育て広場みたいなところに勤めたんですけど、そこのお母さんたちが「室内じゃなくて外で遊べる場所をつくりましょうよ」つて言い出して、引つ張り出されたみたいな感じ。私、東京都文京区で生まれて皇居の近くの女子伝統校に通つて、ぜんぜ

んアウトドアタイプじゃないのに。ははは。

それですまずプレーパーク（プレーリーダーと呼ばれるスタッフを中心に大人たちが見守るなか、野外で子どもたちを自由に遊ばせる場）を始めました。そして、プレーパークに来ていた子育てサークルのお母さんたちが、「幼稚園預けるのやめたわ！ ひろみさん、外でやって、外！」って言い出して、5家庭7人の子どもが集まって。「えっ、決めるんだ。ほんとに、やるんだ……」みたいな。

2009年にまめのめをスタートしました。一人一人が可能性をもった大事な種^{たね}。それぞれのペースで咲くといいねという思いを込めて、お母さんたちが命名しました。NPO法人名は児童精神科医の佐々木正美さんの名著『子どもへのまなざし』からきています。佐々木さんが日野市で講演会をしたときに、お母さんたちみんなで聞きに行つて、心を驚^わづかみにされて。

そこからNPOの設立趣意書の文言^{しやくご}について灼熱^{しゃくねつ}の公園で何時間も語り合ったり……。初期のあれは面白かったですねー。サービスの受け手には成り下がらないぞという気概をもつて、自分たちの思い^{おも}が叶^{かな}う場を自分たちでつくっちゃおうというひとたちが集まりました。

そうして形ができてくるとこんどは、「成長って何だろう?」「親が育つって何だろう?」「そもそも、育たないとダメなのかね?」なんて問いが次から次へと出てきて、みんな話し合う。目からウロコの連続でした。

たとえばお迎えのときに「今日こんなことがありました」みたいな報告はしないでくださいと言われる。「なんで?」って聞いたたら、「子どもから直接感じたいから」という答えが返ってくる。

あるときは、「ひろみさん、うちの子が『おまたじゃくし』って言ったのを『おたまじゃくし』って直したでしょ!」って怒られる。「いまを楽しみたいんだから」と。

一方で、「結ぶっていうのは大事にしたいから、お弁当箱を包むのを当たり前にしたい」と言われて、「うーん、2歳児には難しいかも……:」というやりとりをくり返すうちに、いつの間にかできるようになるもんですね。

私はあまりこだわりのないで、その都度「そんなもんかなあ」と思ってやってみました。新鮮でしたね。

親のこだわりが強くなりすぎると、弊害もあります。たとえばお砂糖を厳しく制限しているおうちの子が、大人の目を盗んで甘いものを食べるようになってきたり。テレビは

いっさい見せないと決めちゃうご家庭もね……。

とにかくパワーがあつたんですよ。「汚さないで」「ケガさせないで」なんてことは言わない。お勉強的なことを求められることもいっさいなかったし、むしろやらせないでというひとが多かった。子どもには育つ力がもともと備わっているから、ありのままを認めてくれればそれでいいという部分は一致していたんです。

良くも悪くも「自分たちのめがねに適かなわないと仲間に入れない」くらいに団結力も強かった。人間関係がぎくしゃくしているときには、「えー」とか「ふー」とか言いながら私はただオロオロしてました。

お母さん同士の関係は、濃くなればなるほど面倒くさいんですよ。ぶつかり合いがあったり、違いをガツンとやったり、攻撃的なひとが入ってくることもあったり。でもそうすると、ちよつとゆるめようというひとが必ず出てくる。「めんどくさいのを楽しんでね」とよく言います。

そうやって、お母さんたちの思いを一つ一つ丁寧に受け止めてまめのめは柔軟に形を変えてきました。だから視察に来たひとに「どうやったらこういうのつくれますか？」と聞かれても困ってしまうんです。

乳幼児を育てていたお母さんグループが始まりなので、初期のまめのめは、2歳児ばかりでした。何年か経つと、1歳児から5歳児までがいつしよに遊ぶ集団になりました。

その経験からいわせてもらえば、ようちえんとはいつても1〜2歳児がいるほうが絶対面白い。いまは2歳児以下がほとんどいなくなっちゃってそれがさみしいですね。小さい子たちの言葉にならない思いをわかっただけとすると5歳児というのがすごく面白くて、小さい子がいるほうが大きい子が大きく育つんです。小さい子も、みんなの妹弟みたいな感じで大きくなるし。

入園希望者には必ず事前にプレパークに参加してもらいます。そこで子どもを遊ばせながら、保護者とお話しします。そこで必ず「なんでうちを選んだの？」と尋ねます。そうすると、お母さんの苦しさとか、ここにたどり着くまでのモヤモヤとかが出てくるんですよ。いまの幼稚園とか保育園のしくみのなかで苦しんでいるひとは多くって。

食育に力を入れている保育園に通っていたけれどコロナになって時間内に食べ終わらないと怒られちゃうようになって、みるみる子どもの表情がこわばっていくのがわかったからうちに来たというご家庭もあります。

年長に上がるときに、いまのお子さんの状態では手に負えなくて困りますと告げられた

という親御さんもいました。「『いっしょに考えましょうよ』じゃなくて『排除します』ってこと?」みたいな。

そうするとお母さんは自分を責めて落ち込んできて。でもそれは子どもにも良くないから、「まず、笑おつか?」って。

逆に保護者からいちばん多い質問は、「学校に行って困らないんですか?」です。

不安な気持ちはわかりますが、反対に「どんな準備をすれば安心なんですか?」ってことですよね。水泳もやって、字も書いて、お話もできて、英語もやって……それじゃ幼児期なくなっちゃうでしょ。「幼稚園と学校はギャップがあつて当たり前だから、困りながら行きましょうよ」と伝えます。

こうして腹を割って話すことで、自然に来るべきひとが集まってきますね。「うちは駆け込み寺かい?」とも思いますけれど。あはは。

ダメな自分って言っていた親御さんが、自分のできることで誰かが笑顔になつたりするのを体験すると、バンバン元気になってくれます。子どもの居場所といいながら、親の居場所でもあるという。ここではそのひとらしくいてくれればいい。子どもは子ども同士ですくすく育っていくので。大人がそれを引っ張ろうとしたり、急がせたりすると、子ども

は苦しくなっちゃう。

その意味で、「幼児教育」という言葉にもひっかかりがあるんです。「教育」っていつてしまうと、大人がよかれと決めた方向へ近づけるイメージになってしまうから。

「しっかりと子ども時代を生きないと、大人にはなれないぞっ！」って。でも、みんな少しでも早く大人にしようとしますよね。わが子にはそうなっちゃうんです。よかれと思って。だから近くに第三者がいないと。

わが子だけを見て、私の責任でこの子を立派に育てなきゃと思うとつらいでしょ。わが子が当たり前にできていることは、親の目にはすぐ見えなくなっちゃうから。初めはよちよち歩きをしただけでもうれしかったのに。

「君のここが面白いよねー」って誰かに言ってもらえることが、子どもには絶対大事。よそのおうちと子どもを交換するくらいの気持ちだと、いいところが見えてきます。

このまえ、高校1年生になった卒園生が来てくれました。小さい子たちに向かって「ぼくはまめのめるときはものすごいわがままだったと思う。でもね、ひろみさんは聞いてくれた。でもあんまり言いすぎるとひろみさんももうおばあさんだから、ダメなんだぞっ！」って言っていて、おかしくて、おかしくて。

幼児期だけじゃなくて、ずっとつながっていられるのがいいんですね。子どもの成長を追いかけるように親も大きくなっていきます。それがいちばんうれしいことですよね。

(以上、ひろみさん)

初期のまめのめは結構もろい集団だったのではないかという気がします。でも、『子どもへのまなざし』というバイブルと、ひろみさんという緩衝材かんしゅうざいがあったからこそ分解を免まぬかれたのかもしれない。

ひろみさんがやってきたことは、子どものためになることを足し算するのではなく、むしろ幼児期に優先順位が低いものを引き算することでした。

親は、わが子のためにと思つて抱えきれないものを抱え込んで重荷に耐えかねてしまふわけです。そこにさらに重しを乗せようとするよりも「あ、それいらぬよ。これもなくても大丈夫」と仕分けをするほうが大切であることは言うまでもありません。これまでの私の取材経験からしても、情報過多時代の子育ての大原則は「迷ったら引き算」です。